

第2 2期火災予防審議会地震対策部会第2回小部会開催結果概要

- 1 開催日時
平成27年10月5日(月) 09時30分から11時30分まで
- 2 場所
スクワール麹町 4階 羽衣の間
- 3 出席者
 - (1) 委員(7名、敬称省略、五十音順)
10 市古太郎、糸井川栄一、伊村則子、梅本通孝、加藤孝明、亀田賢治、杉谷陽子、
廣井悠
 - (2) 東京消防庁関係者
震災対策課長、総合防災教育係長、防災調査係長、防災調査係員4名
- 4 議事
 - (1) 地震対策部会第1回小部会の開催結果概要について
 - (2) 審議事項
 - ア 本審議における検討の流れについて
 - イ デプスインタビュー及びプレアンケートについて
 - ウ 本アンケート案と各設問の狙いについて
 - 20 エ 本アンケート後の分析のイメージについて
 - オ 防火防災訓練コンテンツの方針について
- 5 配布資料
 - 地小資料2-1 地震対策部会第1回小部会開催結果概要(案)
 - 地小資料2-2 本審議における検討の流れ
 - 地小資料2-3 デプスインタビュー及びプレアンケートの結果概要
 - 地小資料2-4 防火防災訓練における意識構造
 - 地小資料2-5 本アンケートの設問の狙い
 - 地小資料2-6 本アンケート案
 - 地小資料2-7 本アンケート後の分析イメージ
 - 30 地小資料2-8 防火防災訓練コンテンツの方針
 - 地小資料参考資料 デプスインタビュー発言録
- 6 議事概要
 - (1) 開会
 - (2) 議事
 - ア 第2 2期火災予防審議会地震対策部会第1回小部会の開催結果概要について
事務局より地小資料2-1に基づき、第2 2期火災予防審議会地震対策部会第1回における議事概要について説明がされた。
 - イ 本審議における検討の方向性等について
40 事務局より、地小資料2-2の説明がされ、以下の審議が行われた。
[委員]
一年目は、訓練へ参加するに至る意識の構造分析を行い、セグメントごとに攻めるべきツボを発見、あるいは、セグメントに対するアプローチ方法の構築をし、これを基に、二年目

は訓練への参加を促すような、セグメントごとにツボを刺激する訓練に先立つワークショップか社会実験を行うという理解でよろしいか。全体の流れを教えてください。

[事務局]

ワークショップではないが、実証実験のような検証は行い、参加に対してどのように変化があるかを探っていきたい。

[委員]

検証は、働きかけを行うグループと行わないグループを比較する予定ということによろしいか。

[事務局]

10 お見込みのとおり。

[議長]

今年度のアウトプットは、今まで東京消防庁が把握してなかったセグメントの方達に対してどうアプローチするかのモデルを出し、次年度は、それに基づき検証を行い、アプローチの有効性の判断をする予定である。有効性の判断は後々議論していくこととする。

[委員]

委員の方々は、達観的にツボを心得ている。その知見と今回の調査で分かっていた知見を精査し、ワークショップなどの形に持って行っていただきたい。

[議長]

20 現在、ワークショップという言葉が出ているが、まだワークショップの形になったというわけではない。それと、防火防災訓練に関しては、東京消防庁だけではなく、各自治体も関係しており、訓練へのアプローチは区役所等も行っている。区役所等と東京消防庁の役割を整理しなければ、東京消防庁が全部担うことになり兼ねない上に、訓練モデルも作りづらくなってしまう。よく整理したうえで議論していく必要がある。

ウ デプスインタビュー及びプレアンケートの結果について

事務局より、地小資料2-3の説明がされた。

[議長]

30 居住形態は、結果にかなり影響すると思っていたが、あまり影響していないというのは意外である。

[委員]

居住形態が影響を与えてないというのは、首都直下地震が30年以内におきる、建物倒壊が何棟発生するなどの知識があったとしても、自分の身に降りかかるイメージが全くないため、戸建て住宅でもマンションでもイメージがわいてないのであろう。当事者感の意識がないため、スキルとは？自分が持っているのか？どうやって獲得するのか？というわからないことが雪だるま式に出てくるため、参加意欲も削がれていくのではないか。

[委員]

40 デプスインタビューでは6人中5人が、被災経験があると答えている。災害はイメージ力であり、自分が被災しているかで活動や準備が変わってくる。被災経験のあるなしは重要な要素である。

[委員]

正常化の偏見とあるが、東京全体のことを言われても自分自身に置き換えられないのではないか。東京で何十万棟焼けるといわれても自分はどうしたらいいかというのが想像できてないと思う。もっと、災害イメージを具体的に示すことが必要である。

[委員]

リスクを過小評価しているのは正常化の偏見ではないのではないか。正常化の偏見は極度の危険な状態の時のものであり、むしろ被災状況のイメージを持っていないことや、防火防災訓練の効果の評価を行えていないことが原因と思われる。防火防災訓練がどのようなものかというのが理解されていないのではないか。そのような問題を正常化の偏見とまとめるのはいかがなものか。

[事務局]

イメージを持っていない可能性はあると思う。デプスインタビューの結果から、訓練とは学校の避難訓練や自衛消防訓練を想像しており、防火防災訓練とはどのようなものかイメージできていなかった。

10

[委員]

アンケートでイメージができていないか聞くか、イメージを固定させなければならない。

[事務局]

了解した。

[委員]

アンケートで訓練効果の理解とあるが、一言で訓練を理解しているか聞いても、訓練によって内容は全然違い、遭遇した困難に対して対応しなければならないというのは、それぞれの遭遇状況によって違い、その効果は密接にリンクしているはずである。

そのことをどうやって聞けばいいのか検討も必要である。曖昧に一緒に聞いても、どんなところにニーズがあるのか、評価がされているのかということがわからなくなる。

20

[委員]

防火防災訓練のカテゴリー分けについてであるが、資料2-8のような分け方では、細かすぎてわかりづらいのではないか。

[事務局]

資料のカテゴリー分けは東京消防庁で整理しているカテゴリー分けである。

[委員]

例えば、命を守る訓練といったカテゴリー分けをしたらよいのでは。

[委員]

正常化の偏見についてであるが、ある程度切迫性を持った状況下で起こるのが正常化の偏見ではないか。我々が行おうとしているのは平常の中でどう対応していくのかということであるため、正常化の偏見を当てはめるのは、必ずしも適切ではないと思う。正常化の偏見ではなくリスク認知でよいのでは。正常化の偏見が原因と言っても様々な事柄が正常化の偏見と判断される可能性がある。

30

[議長]

リスクにおける偏見というと思う。リスク認知の偏見や正常化の偏見をなくそうというアプローチもあるし、こういう偏見があるという前提としてどう組み立てるかという話もある。正常化の偏見というものが存在しているという前提でアプローチにした方が通用しやすいと思われる。

[委員]

P5の下段に記載されている、具体的なイメージができない理由として、知識や情報の不足ではなく、正常化の偏見によるものであることが考えられるとあるが、因果が逆でないか。知識や情報がないため、地震は起きないなどと言い訳をしてしまうが、対策法を提示してあげれば、正常化の偏見やリスク認知は軌道修正できる。具体的なイメージができないから正

40

常化の偏見という解釈はおかしい気がする。

[委員]

大規模災害の最近の議論では、認知的不協和と言われることがある。

[議長]

何が適切な言葉か判断しかねるが適切な言葉に入れ替えていただきたい。

[委員]

子供世帯が同居して孫の面倒を見ている方達のセグメントや、子供世帯が近居しているといった、孫をキーワードにしたセグメントもあるのでは。また、親を介護しているパターンはどう出るかも気になるところである。

10

エ 本アンケート案と各設問の狙い、本アンケート後の分析イメージ、防火防災訓練コンテンツの方針について

事務局より、地小資料 2-4～2-8 について説明がされた。

[議長]

防火防災訓練の潜在的なニーズを掘り起こしていくこと、既存訓練と掘り起こしたニーズをマッチングさせること、様々な訓練をパッケージ化することを考えながらアンケートの設問を見ていかなければならない。

[委員]

事務局側としては、アンケートの設問数については削っていきたいのか、もしくは、増やしたいのか。

20

[事務局]

増やしても問題ないが、もう少し取捨選択をしたい。

[委員]

資料の 2-4 の意識構造についてであるが、災害知識が欠落しているから訓練の必要性があるのか、それとも、災害知識をたくさん持っているけど具体的な行動がわからないから訓練の必要性の理解が必要なのか。また、発生リスクに正常化の偏見が関わっているというならば、発生リスクを高く認知させればいいという話になってしまう。なぜ、発生リスクの認知に関する構造解析が必要となる。そういった解析が訓練の参加を促す働きかけの部分にならないと実際の働きかけが見えない。訓練に参加するための必要条件を探らなければならない。

30

[委員]

正常化の偏見にしる、共分散構造分析だけでアンケートを分析するのは不十分な気がする。きちんと単純集計や変数との関連を考察するなどの分析が必要である。

共分散構造分析のモデルが複雑すぎるような気がする。もっとシンプルなモデルを作っておいて、この資料 2-4 のモデルとシンプルなモデルの中間くらいが現実の構造である。シンプルなモデルと相対比較するのが共分散構造分析の仕方である。

アンケートの設問は、4 段階のものがあるが、5 段階の方がいいと思われる。アンケートを作るときは、イエスかノーのグラフを作成したいときは 4 段階で作る。統計モデルに入れる分析をするならば尺度を多く持たせ方がいいので、4 段階より 5 段階の方がいい。

40

[委員]

発生リスクや不安感に正常化の偏見が関わっているとすると、リスクが高いと思うから不安と思うのと、リスクが高いと思うほど不安感を抑えるために低く答えてしまう、という両方の現象が起きており、相関の有意性が見られない恐れがある。単純に変数の分布を見るな

どの分析を行ってからモデルに入れるべきである。

災害イメージを具体的に持たせると、怖いや目を背けたいといった、避けたいと思う心理イメージが働く。当事者感を持たせることや災害イメージを持たせることは防火防災訓練への参加意図に対してネガティブな影響を持ちかねないので、気を付けた方がよい。怖いイメージを植え付けるだけで終わってしまわないようにすべきである。防災訓練で不安を払拭できることを強く打ち出すことも重要である。アンケートでは、地震や災害に対してどれくらい不安かを聞いている項目があると思うが、防災訓練の参加の有無によって不安がなくなった、軽減したという結果が得られると、不安や恐怖を軽減する構造や今現在の防災訓練の効果の測定ができるのではないか。

10 [委員]

不安は、理解すると不安になるという構造がある。理解できたから不安になった、だから何かをしなければならぬ。不安かもしれないけど、命を守る行動をするという形になると思う。

[委員]

今回は難しいかもしれないが、安心感のようなものを聞いておくといいかもしれない。不安感と安心感の両方を持ち合わせているのが実態なのかもしれない。

[議長]

委員の方々は、経験から不安感と安心感のバランスは持ち合わせていると思う。脅かし過ぎていけないし、安心しきるようなメニューを立てて教え込むというのはいけない、自分たちの自己満足的に考えているのはいけない。経験上、バランスを取ったところを先生方は狙っている。最終的にモデルを作るときは、そういった知見も加味してセグメントごとにモデルを作ると思われるが、そのために、今回のアンケートで必要なことは、どういうセグメントがあるかと、必要最低限におさえなければならないもの（ツボ）がアウトプットとして出てきてくれることが必要である。

20

[委員]

地小資料2-6のQ1-9のようなリスクを確認する設問を整理・分類して、Q2-7も大きく括ったリスクごとにリスクを下げるための訓練というように対応させた方が後から分析しやすいと思われる。

[委員]

30 Q2-2は、訓練内容がわからないと判断できないのではないか。写真や地小資料2-8の実動訓練の事を書き下して、誰でも理解できる言葉に置き換えると集計しやすくなると思われる。

また、このアンケートは訓練が重要であるということを前提にスタートしている。訓練は重要ではないと思っている人、訓練に重要性を見出していない人は抽出できるのか。

[事務局]

不参加の方に参加しなかった理由を聞いている。

[委員]

40 Q1-6は、こういう事象が自宅もしくは東京で起きるかという広がりリスク認知であり、一方でQ1-9は自宅もしくは近所で聞いているが、2つの役割分担が不明である。Q1-6とQ1-9をどうやって分析するのか。

[事務局]

Q1-6は地域的な広がりを見ている設問であり、Q1-9は起きると思っているのかという確率の認識を探る設問である。

[委員]

Q 1 - 6 は直下型地震という表現にした方がいいのではないか

[委員]

Q 1 - 9 と Q 2 - 2 のスキルの問題と Q 2 - 7 のどういう訓練が必要かリンクした形の分析をできるようにしてほしい。Q 1 - 9 の当事者間は認知的不協和の結果としての回答となるが、そういう結果が出てきたときに、防災訓練に参加を促すためにどのようにしているかがわからない。認知的不協和のため過小評価しすぎということとは言えない。

来年、どのようにつなげていくか、この辺の設問に出てくると思う。

[委員]

10 Q 3 - 8 は、地域の密着度や土着感を探りたいと思うが、お住まいの地域というのはどれぐらいのイメージなのか。Q 3 - 7 の郵便番号は考えに影響が出てくると思われる。設問はシビアにした方がいいのでは。個人がイメージする地域でいいのか、どの人にとっても同じような尺度にするのか、考えた方がいいと思われる。

[事務局]

主観にするつもりである。

[議長]

主観にする必要はないのではないか。

[委員]

20 地域性のつながりが強いと地域は狭くなる。人のつながりの地域性が弱いと地域は広くなる。尺度はきっちりした方がいいのではないか。

[議長]

事務局に検討していただきたい。

[庁内関係者]

資料 2 - 5 の標本割りは、小学生までの子と同居しているとあるが中学生までとどちらがいいか。

[事務局]

30 防災教育の目標で小学生までは自助的なことを目標としているが、中学生は公助的なことを目標としているので、仮に小学生という線引きをした。プレアンケートで年齢を聞かなかったので、線引きは正確にどうしたらいいかはわからない。親の視点というのを重視すると中学生までかもしれない。

[委員]

子供の年齢は聞いているので、小学生、中学生、と同居している人数は聞いているため、最初に標本を分けなくても、数は偏るが統計的な分析はできるのではないかと。なので、どちらでもいいと思う。

[事務局]

Q 2 - 2 に写真を入れるという委員の意図を教えてください。

[委員]

40 見せる写真に資料 2 - 8 の全ての写真を見せるべきであり、訓練内容を知らない、わからない人はできないに○を付けるが、事務局としてはそれで構わないのか。

[事務局]

事務局としては訓練内容がわからない人は、「できない」に分けた方がいい。

[委員]

訓練内容がわからない人とできない人を分けた方が、いい分析ができるのでは。

[委員]

Q2-2で聞きたいのは、訓練ができるかではなく、地震が起きた時にスタンドパイプ等の操作ができそうかを聞いていると思う。今現在、AEDを知らないという人はなかなかいないと思う。スタンドパイプくらいか。訓練内容を知らないという人はたくさんいると思うが、事務局としては地震時にできそうかであるから、「知らない」は必要ないのではないか。

[委員]

知らない場合はできないに○をしてくださいと記載すればいい。

[委員]

Q2-9あたりで地域のコミュニティーを聞いているが、いざという時に助け合えるもしくは助けたいというパーソナルなネットワークがあるかないか、と聞くと今後使いやすいと思われる。

10

(3) その他

事務局より、第3回の小部会は11月中をめどに調整する旨を説明した。

(4) 閉会